目次

聖語
法華經の信解（完結）……日生上人
日生上人と統一の大教……床次竹二郎
本多上人の遺業を奉じて……小林一郎
記事
○質疑應答　○本部團報
○各地教信　○寄附團費誌料領收

第三十八年五月號

聖語

如來の聖教に隨佗意　隨自意と申す事あり、譬ば子の心に親の隨ふをば隨佗意と申す、親の心に子の隨ふをば隨自意と申す、諸經は隨佗意也、佛一切衆生の心に隨ひ給ふ故に、法華經は隨自意也一切衆生を佛の心に隨へたり、諸經は佛說なれども是を信ずれば衆生の心にて永く佛にならず、法華經は佛說也　佛智也一字一點も是を深く信ずれば我身即佛となる、譬ば白紙を墨に染むれば黑くなり、黑漆に白き物を入るれば白くなるが如し、毒藥變じて藥となり衆生變じて佛となる故に妙法と申す。

（新池抄縮遺一八四七）

法華經の信解（完結）

日生上人

第二の宇宙觀に就いてはどういふことが大事かと申せば、即ちその一つは方便品に說いてあるところの諸法實相といふことである。諸法の實相といふこともやはり同じ關係で、あらゆる存在天地宇宙に存する一切のものは皆な始め無く終り無き存在者である。一事一物と雖も、何にも無いものが新しく生ずること無く、有りしものが徒に消えるといふことは無い、一切諸法不生不滅と言つて、生じたる始め無く、滅する終り無し、本來有りしものらは有りし儘である、それが或る事柄に依つて多少の變化はして行くけれども、やはり有りしものゝ變化であつて、決して滅くなるものでもなければ、無いものが出來るものでもないといふことが、諸法實相といふことに就いて一番大切なことになつて行くのである、それが不生不滅本來常住といふことである。

今日の哲學の議論にしたところがやはりさうで、哲學といふものは一面は實在論と言つて一切のものゝ存在の意義を明かにし、一面は觀念論、認識論であつて、その實在を正當に了解することである。法華經はその兩方がちやんと敎へてある、諸法の實相と、その諸法の實相に對する適當なる信解、即ち哲

學が要求するところの實在論と觀念論とに於いて、その兩方とも最も正しきものを與へて居るのである

その觀念論の親玉が佛樣であつて、所謂如來の知見を具へて居る、佛は諸法の實相を究盡し給へりと言つて、佛の知見はその觀念の親玉である、宇宙の實相を間違ひなく知つて居る、それをお前等にわかるやうに話をするのであるとなつて、法華經の敎は出來て居るのである。

それであるからこの宇宙の實相といふものに就いては、餘りにいろ〳〵の事が澤山あるやうで譯がわからぬやうに思ふ人があるけれども、これは神樣が拵へたの、何にも無い所から湧いて來たのといふものではない、一旦形を現す限りのものは、必ず本からの存在者である、あらゆる現象といふものは本來有りしものが顏を出すのである。窓から娘が顏を出したとしたならば、そんなものが俄にガラスの所に湧いて來たのではない、やはり部屋の中に居つた娘が覗いたのである、それが引込んでしまつた、見え なくなつたから消えたと思ふとさうではない、炬燵に入つて坐睡をして居るかも知れない、臺所で御飯の支度をして居るのかも知れない、又翌日は窓から顏を出すこともあるだらう。それと同じやうに、凡そ宇宙に相を現す限りのものは、本來無いものが一遍でも顏を出す氣遣ひはない、一遍顏を出した以上にはそれが消え去ることは無いといふことを原則にするのである。

その事は哲學を少しく學んだならば直にわかることである。今日の世界の知識はさう認めて居る、一切のもの原因無くして生ずるもの無し、存在せるものは意味なく消えるといふことはない、不生不滅が

哲學の大原則であり、眞理の親玉であるといふのはそれである。その哲學の大原則に副ふやうに、法華經はビシ〳〵と諸法の不生不滅といふことを說いて居る。實にえらいものである。今日まで世界中の人間が數千年間寄つて蝟つて論究したる眞理の原則として、今申す實在論と觀念論といふものが哲學の上に說明されるやうになつた。その法則が確立するに從つて、さて顧つて考へて見ると、佛敎の說明はビタリとそれに嵌つて居る、實に驚嘆すべき事實である。西洋人は今に必ずや佛敎といふものに對して絕對の信仰に入ると私は思ふ、彼等は永年苦心した、宗敎と哲學が一致しない、信仰と知識が相反するといふことは、こんな情けないことは無い、どうか信仰と知識を握手せしめたいといふ熱望、それが二十世紀に於ける人類の最大の事業であると彼等は叫んで居る。その熱望に副ふものはたゞ佛敎あるのみである、近來は薄々その事が彼等にわかつて來たやうである、まだ本當には握り得ないけれども、現代の行詰つた文明を救ふものは他に無からう、佛敎の中からヒントを得て、それから悟つて行くことに依つてのみ現代が救はれるのである、無論佛敎の說明に於いては、時代の趨勢に順つて多少變更を試みなければならぬ所もあらうけれども、支持するところのその根本は佛敎の中に於いて得られるといふことは、凡そ具眼の士は東西共に悟つて居るところである。

さういふ大きな希望を滿すものが何處にあるかといふと、即ちそれは佛敎の中に於いても法華經がこれを有つて居るのである。これはこの宇宙觀に於いて諸法の實相といふことに就いても、神樣が世界を

造つたとか、何にも無い所からムク〳〵と出來て來たとかいふやうな馬鹿氣た從來の說明を根本から認めない、モツと合理的な法則に依つて說かれて居るものが法華經である。

それが前に申す通りに、一切の諸法は互に相關聯して居るものである、帝釋天王の御殿にあるといふ透明つた水晶の珠が互に映り合つて居るやうなもので、この珠の中には他の珠が映つて居るといふやうな調子に、萬有は互に相關聯して居るものである。それ故にこの諸法の實相を究め盡したならば、何事の中にも尊い意味合が現れて來るのである。表面は粗末に見えても互に具へ合つて居るのであるから、その內面に於いてはこの上もない尊さが發見されて來る。人間の世の中の出來事、その日〳〵に消え去ることのやうに見える事も、そこに又尊い意味があるのである、人生を營んで行く上には每日食つたり飲んだりして、腹が減る、又食ふ、又減るといふやうなことをやつて居るのはつまらぬやうにも考へられる、何遍でも腹が減るのだから、いつそ食はずに置けば世話がないではないかといふやうなものだけれども、さうはいかぬ、僅に二時間か三時間で減つて行く、パンを詰込んだり味噌汁を飲んだり、忙しいのにいろ〳〵なものを食つたり飲んだりして、少し何かすると又減つた、又詰込んだといふやうな事を繰返して居る。考へて見るとつまらない事のやうだけれども、さういふことの間に人體を保持してその上に偉大なる事業を人生の上に爲し遂げ、又自分一人に取つては樣々なる善を行ひ、德を積み、往いては永遠の榮に進む力が、そのパンを噛つたり味噌汁を吸つたりする中から出て來るのであつて、考へて見ると粗末な事のやうな中に廣大なる意義がある。パンといふものは、唯だこれを皿の上に載せて置いた時には、麥の粉を固めて燒いたものに過ぎないけれども、それが一たび人間の咽喉を通つて胃袋に入つて血となり、肉となり、力となる時には、その麥の粉がどんな大きな事業でも爲遂げることが出來る。外に在れば麥の粉、內に入れば生命、さうして生命は一切の活動の源泉になるのである。實に世の中は面白いものである、これはパンの一片に過ぎない、何でもないと思ふけれども、この一片のパンに依つて偉人が救れたとすれば、その人の生命を續けて行けばどんな立派な事でも爲し得るのである。

さういふ風な微妙な所を法華經は說いて行くのであつて、他のお經ではたゞ人生は有爲轉變の世の中である、何もかもつまらぬ、大きな家を建てゝも燒けてしまふ、可愛い女房だつて死んで別れて行く、何もかも夢だと思つたならば何の價値も無い、「あゝ浮世は三分五厘ぢや」と斯うなるけれども、法華經はそれを逆に、パンの一片が大切な人間の生命に變つて廣大無邊の働きもするのであるから、人生に存在するもの縱ひ粗末な一微物でも、廣大無邊の尊さを有つ、その價値を考へなければならぬといふことを敎へて行くのである、その代り何でもないと思ふことでも非常な影響がある、夫婦喧嘩なら夫婦喧嘩でも、それが非常な大きな影響を及ぼすのである、女房の頭をポンと撲つたといふやうなことは何でもないやうであるけれども、それが姙娠して居る胎兒の頭に響いた爲に、立派な子供が出來るのがその事の爲に普通の人間になつてしまつて、大した事をしない、若しもその影響が無かつたならば、或は日蓮

の如き或は秀吉の如き偉人が生れたかもわからなかつたのである。亭主が酔ぱらつて女房の頭をポンと叩いたといふことが、遂に日本の國家を救ふべき偉人を殺したといふことにもなり得る。非常に重大な關係を、何でもないと思ふやうな事の上に產んで來る。さういふ所に人間の生活といふものは非常な興味を感じて行くのである。

さうしてその宇宙の實相を究めて行くと、一番大事な事柄はやはりこの宇宙に尊い佛樣がござることを認めるのである。仰いで天を見、俯して地を見ても、あゝ廣大なるかなと言つて、大きい方ばかりに氣を取られては駄目である、廣大であるといふことを認めたその次には、この廣大なる宇宙の中心に佛在せりといふことを考へなければならぬ。人間の心は何でも自由に考へられるといふ、その心の働きの廣く大きいといふことよりも、その中に尊き佛樣を有難く考へ、その佛の有難いといふ考を根本にして、いろ〳〵な善い事をする考がそこから湧いて出て來る、道德的の泉が開かれて快くいろ〳〵の善い事が出來るやうになるといふ所が大切なのである。そこで廣大な天地ではあるけれども、上には尊き佛を認め、下には我が心の中心に信念及び道德性の發現を認めて、それが廣い天地の中の一番大事なものぢや。佛の尊さと、自分の信念及びその信念の働きといふものを大切にして行くことを教へるのが、法華經の宇宙觀となつて現れて居るのである。

それは法華經の方便品、壽量品及びその次の分別功德品に於いて佛は常に耆闍崛山に在ましして法を說き給ふ、それは唯だ一時的の佛ではなくして、宇宙觀の上に佛の存在を認めて說いてあるのであつて、その宇宙觀の中心に人格の實在を認めたといふことが、法華經の非常にえらい所である。他のお經では實相を說いて行くと佛も消えてしまふ、自分も消えてしまつて、宇宙はたゞ茫漠として本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かんといふやうなことで、何もかも無くなつてしまふやうに考へた者もあるけれども、それは消極的の實在論であつて、非常に低い考である。西洋でも抽象實在論と言つて、さういふ風に何にも無い所が有難いと考へたやうな說は取るに足らぬのである。所謂具體的實在論で、ちやんと宇宙の諸法が存在し、その中に於いて尊きものは人格的の佛である。又我が心も不滅であり、その中の働きが尊いのであるといふことを、具體的に、建設的にチャンと抑へて信念を打立てることが、最も進步した哲學であり、宗教であり、それが法華經である。だから禪宗坊さんなどの言ふのとは違ふ、彼はフラ〳〵して居る。本來無一物ボカン……といふやうなことを言ふ、それはいかぬ、ちやんと見定める所がなければならぬ。

それであるから日蓮聖人の如く、あの頸の座に据ゑられても毅然として「大覺世尊代らせ給ひしか、これ程のよろこびを笑へかし」といふ、あの感激を有ち得るのである。或る禪宗の坊さんが「心頭を滅却すれば火もまた涼し」ナンと言つて、火事で燒き殺されたら熱いだらうと言ふけれども、それは心が熱いと思ふからである。この心をバンと打壞してしまつたならば熱いも寒いも無いといふやうなことを

言つた。成程自分といふものを無くしてしまへば、火事も熱いことはないだらうけれども、心頭を滅却すると同時に自分自身の身體も滅びてしまふ、さういふ風なことは甚だ消極的である。日蓮聖人の如く『首斬るべくんば急ぎ斬るべし、』首を斬られたら痛からうけれども、痛いのは僅かの間のことである、『これ程の悦びを笑へかし』この精神を貫くその前途には斯ういふ歓喜に満ちて居るぞといふことが、本當の心のきめ方である。心頭を滅却すれば火もまた熱くないナンと言つて火事の中へ飛出して行つたところが、火の粉が頭から落ちて來たならば、やつぱり熱い〳〵と言つて逃出さなければならぬ、どうしても人間は本當の思想觀念に活きて、積極的に進んで行かなければならない、それが法華經の實相觀である。

いま一つは佛身觀であるが、これが又非常に能く說いてある、大體は前に言ふ實相論の上に打立てられたのであるが、一切の事物が存在する位であるから、その中に於いて一番尊い意味の存在が佛樣である、何もかも不滅であつて、無くならないのであるから、その中に於いて佛樣は一番存在の意味が確實である。

さうしてその佛樣が壽量品に說かれたやうに尊い活動をなさるので、始め無く終り無く、十方法界に活動をなさる佛である。何もたゞ一個の釋迦如來として働かれるばかりではない、釋迦如來を中心にして、これを推擴げれば、何時の時代でも如何なる所にも活動をなさつて居る佛である。その考へ方は、

現世に現れし佛を通して考へるのが宜しいのである、お月樣を觀るのでも、今夜東京の街を照す月を觀たら宜い、これが古い昔に出た月であり、これが三笠の山を照し、嚴島を照し、ナイヤガラの瀑布をも照す月である。三笠の山の月、三井寺の月は別にある……さう思つてはいかぬのである。この月に就いて、處からいへばあらゆる月の名所から眺めて、古來月に關するいろ〳〵の感興を歌はれて居る、或は支那人が洞庭湖に船を泛べて美人を天の一方に眺めると言つて喜んだのも、或は安倍仲麿が「三笠の山に出でし月かも」と言つて歌つたのも、處は違ひ時代は異つても、今夜隅田川の堤に於て自分が眺めて居るこの月、これより外には無いのである、この月が曾つて古い時代にあらゆる所を照した月である斯ういふ風に開顯するのである。それを逆に行つて、「こんな月はモウ觀ふるした。三笠の山で昔の人が觀た月の滓ちや」といふことに考へてはいかぬ。ところが兎角さういふ風な議論を、他の宗派の餘り賢くない坊さん達が言ふたのである、さういふ謬つた考を賦つて起つたものが法華經である。即ちどこまでも今月今夜この地に於いて、我が眼の前に光を現してござるお月樣、それが如何なる時代にも如何なる所をも照す月なりといふが如くに、このたび我が人生に降誕して佛教を說き給ひし薩婆悉達太子、後の釋迦牟尼、その佛樣が一切の佛樣の中心であり根本であつて、さうして絕對の實在者であるといふ信念に立つのである。この思想ぐらゐ明瞭なものは無い、佛教の中に於いて斯樣な佛身觀が勝れるばかりではない、これは哲學上の知識或は文藝の上の觀念に持つて行つても同じことナンである。單に理想

涙と稱して、事實でない陽炎みたやうなものを見る空想といふものは、決して文藝の上に今日は認められないのである。又事實といふものを單に眼の前に現れたる現象のみに限つて、その奥を考へない、所謂寫眞みたやうなものを取つて、それより外に文藝といふものは無いと考へて居る、所謂寫實派といふものは又あまりに低過ぎて居るものである。事實を離れずしてそこに理想の活躍するやうにならなければ藝術の價値は無い、富士の山なら富士の山を繪に描くとしても、富士の山は斯ういふ風な恰好をして居ると言つて、寫眞を寫して來てその通りに描く、これではまだ此處が凹んで居ないとか、イヤ此處の所は突出して居るとか言つて、寫眞そつくりのやうな富士の山を描いて居る書家は、まだ〳〵碌なものは指けない。その富士の山の眼に見る事實と、その富士の山の理想的描寫といふものとを以つて、そこに精神的に活躍するところの富士の山といふものを描かなければならぬ。一切のものはさうである、その事實と事實の内面の絶大といふものを顯して行かんければならぬ。

人間が尊いといふのも、その通りであつて、形は同じであるけれども、この内面の力を無限に發揚せんとするものである。釋迦如來の尊さもやはりさういふ意味に考へて行かなければならぬ、その原則を法華經は與へて居る。哲學、宗教、文藝、さういふものに對する思想觀念の根本を示して、それが壽量品に釋迦牟尼の名に於いて、即ちこの度出現した釋迦牟尼に於いて絶對の佛であることを示された。即ち自我偈にある通り『我れ佛を得てより來た經たる所の諸の劫數、無量百千萬億載阿僧祇なり』この

間佛に成つたかと思ふとさうではない、我は無量百千萬億載阿僧祇といふ疾うの昔より佛である。その間何をして居つたかと言へばそれより來た『常に法を說いて無數億の衆生を教化して佛道に入しむ』、今度衆生教化に始めて出て來たものではない。さうしてそれは何處でやつたかと言へば『靈鷲山及び餘の諸の住處に在り』で、この世界は言ふまでもなく、その他の諸の住處に遍滿して活躍をしたものである、縱に三世を貫き、横に十方を遍くして、盡十方周遍利益といふ大活動をした、その主人公がこの釋迦牟尼であると說かれて居るのである。これを聽けばハヽッ……といふ絶對の信解が釋迦牟尼佛に向つて行くことが出來る。この一切の活動を統一した中心に佛が現れたのが法華經の佛身觀である。

であるから法華經を信ずる者が、鬼子母神樣に行くの、帝釋樣に行くのといふやうな分裂觀を有つては、法華經の信解にならない。如何なる佛でも如何なる菩薩でも、それはこの釋迦牟尼の應現なりとして、即ち分身應現なりとして考へることは宜いけれども、その根本を忘れたのでは何にもならない。日蓮聖人はこれを天月水月の譬に寄せて開目鈔の中に仰せられた。

此壽量品の佛の天月のしばらくかげを大小の器に浮べ給ふを、諸宗の智者學匠等は近くは自宗にまどひ遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實の月のおもひをなして、或は入つて取んとおもひ、或は繩をつけてつなぎとゞめんとす、此を天台大師釋して云く、天月を識らずして但池月を觀ると。

斯う書かれた、この位なことは法華の信者は皆な知つて居らなければならぬ。この壽量品に顯本せられた本佛は天の一月である、それが萬水に影を宿すが如くにいろ〳〵の活動をなされた、然るに諸宗の學者は、學者と言ふけれども、釋迦牟尼を天の一月として考へることを知らずして、その池に映つて居る月が大事だと思つて居る。今夜はお月見で折角來て呉れたけれども、間が惡くお月樣が遠くて困る、兎に角御馳走を食ふ前にお月樣を伴れて來なければ月見にならぬといふので、いろ〳〵の方法を以つて、或は池の中に入つて取らんとし、或は繩を以つて縛つて引上げるといふやうなことをして居つたのでは月見になるかならぬか、『聲聞何ぞ道を論ずるに足らんや』と天台大師は言つて居る。そんな所に月見に招ばれて行つて、池に映つたお月見をしませうと言つて、その内に御馳走が出るだらうナンと思つて待つて居る奴も馬鹿である、そんな狂人みたいなお月見は御免蒙ると言つて歸つて來たら宜い。佛教を學んで釋迦牟尼如來に於いて絶對の尊さを信解し得ないやうな者が、佛教の教化に從事するといふやうなことがあるべきものではない。聲聞といふのはどつんぼの大馬鹿といふ字である、そんな者と何で一緒に道を語ることが出來やうかと天台大師は痛論して居る。さういふ者の爲には『盃を撤して漢を仰ぐべし』と言つて、盥に映つて居る月にばかり囚はれて「君このお月樣は良いだらう、一つ見て呉れ」と言つてどこまでも盥の水の月ばかり見て、天の月を賞することを知らぬやうな者の爲には、話をしてもわからぬければ仕方がないから、庭先へ降りて行つてその盥の水を引繰返してしまへ、盃を撤するといふのは盥を引繰返すことである、支那では盃といふのは盥のことである、そんな盥は引繰返してさうして漢を仰ぐべしで、大空を指して、お月樣は盥の中にござるとお前は思つて居たらうが、何時の間にか飛上つてあんな所にござるぞと教へたならば始めてわかるだらう、斯う天台大師が言つて居るのである。そこで日蓮聖人が、所謂盃を撤して漢を仰ぐべしといふ事を實際にやられたことを、日本では非常に激しい事をやつたやうに思つて居るけれども、お月見と言ひながら盥ばかり見て居る者の爲には、盥の水を引繰返すくらゐの事はやらなければ眼が醒めないではないか、これは天台智者大師が言はれて居ることである。さういふことを教へて貰ひながら、その流を汲むところの坊さんや信者が又盥の月ばかり見て居る……それは餘りにお師匠樣の苦心を無にするものではないかといふのが、吾々が多年力說して居る顯本法華の趣旨である。

佛教ではどうしても佛樣といふものゝ中心が定まらなければならない。國家では皇室中心といふことが明かにならなければならない、家庭では主人といふものが中心でなければいけない、內儀さんが中心であつたり、番頭が中心であつたり、隱居の婆さんが出しやばり過ぎたりしてはいかぬ、どうしても主人といふ中心を立てなければいかぬ。佛教の信仰の中に觀音樣が出しやばつたり、鬼子母神樣が出しやばつたり、お閻魔樣が出て來て眞中に坐るといふやうなことになつては、佛教の信解は正しきを得ないものである。

そんな事はどうでも宜い、何でも信心さへすれば宜いのだといふことになると、宗教は人の心を導く基準であるから、その宗教の信仰が左樣な亂雜を一たび許したならば、家の内でも、お父さんが眞中に坐らなくても宜いではないかといふやうなことになつて來る、國家の上に於いても、中心といふものは場合に依つたら他のものを持つて來ても宜いではないかといふことになつて、國家の綱紀は忽ち頽敗するのである、そこで日蓮聖人は國賊とか或は亡國とかいふやうなお言葉を叫ばれたのである、宗教の信念と道德上の觀念といふものは、その奥に於いて一致しなければいかぬ。ところが日本人は從來兩刀使ひみたいなことを考へて、左の手には鯨尺を持ち、右の手には曲尺を持つて、物を買ふ時分には鯨尺で買ひ、賣る時分には曲尺で賣る……さういふ事を昔やつた時代がある、それは成程自分には都合が好いだらう、けれども今日以後の人間の精神はさういふことでは、導き得なくなつた、それが二十世紀の文明である。

今日の時代は人間の精神といふものが非常に解放せられて居る。昔のやうに人間の心を藥屋の藥の抽斗みたやうに考へて、これは信心をする心、これは商賣をする心……「今日はお寺に行くのだから」信心の箱から靈魂を出して、まア餘り惡い事をせぬやうに嘘を吐かぬやうにといふので、お寺へ行つて歸つて來ると「モウこれは納つて置け」、さうして今度は商賣の抽斗から靈魂を引出す。或はこれは交際をする心、これは書物を研究する心といふやうに、藥屋の抽斗から風藥や胃の藥を引張り出して來るやうに、精神の使分けの出來る時代はそれでも宜かつたけれども、今はモウさういふ譯にはいかない。人間の精神は水晶の珠の如く、或る一點に打つたるところの墨も朱も、他の方面から眺めれば歷々と見えるのである。知識の方面に於いて否定された事を、信仰の方面に於いて維持して行かうとしても到底許されるものではない。それであるから宗教の信仰は、知識の側からも道德の側からも、あらゆる方面から協力して進むべきところの完全なる理想的の教でなければならぬといふことになるのである。

今では人間の心が使ひ分けが出來るやうに考へて居つたから、それでも濟んだ、或る時は健全なる頭腦、或る時は不健全なる頭腦と、どつちにでも使ひ分けが出來た。右の手では珠數を持つて阿彌陀樣を拜みながら、左の手では嫁の尻を抓つて「コレお前は何です」……ナンマイダー、チーン……といふやうな事が出來た、さういふ人が幾らもある。晝間は散々惡い事をして、日の暮には善心に還るといふ「惡い事をせぬ位ならば信心などするものですか」といふ人がある。「私は惡い事をするから謝る爲にお賽錢を上げるのです、そんなあなたの言ふやうに些つとも惡い事をしなければ、なんで時間を費したりたゝでお賽錢などを上げますか、惡い事をして居るからこそお賽錢を上げて勘辨して貰ふのではありませぬか」……斯ういふ風に信心は贖罪の爲である、だからお賽錢を餘計上げて置けば安心して惡い事が出來るといふ、斯ういふやうな心の使ひ分け、所謂二重生活といふ矛盾したる精神狀態は、どこまでも改めて行かなければならない。隨つて教の方がさういふ緩慢いものでは今後の人心教化は出來ないので

ある。

法華經は斯樣に人身觀と、宇宙觀と、佛身觀に就いての三つの勝れたる敎が本則になつて、これから一々の實際の行爲を導いて、法華經の行法は信念を根本にして菩薩行を開き、その菩薩行も進んで應用が非常に豊富になり、機敏になつて、菩薩行の方便と稱して、實際の人生生活に適合するやうに、或は法華經と政治の關係、或は法華經と國家の關係、法華經と經濟の關係、法華經と生活の關係といふ風に人生各般の事と協力一致して進む所に、最も活き〳〵したる敎の効果が展開されて來るのでありますが本講に於いてはたゞ法華經の本質だけをお話するに止めて、行法に關する事柄、及びその他の事柄は略して置きます。

要するにどこまでも法華經の信仰が吾々の精神生活の根本であつて、それが道義感情を導いて非常な强い滿足を與へ、その滿足の中から善を行ふ力が現れて、さうしてその活動に依つて世の中を組立てゝ行き、國家の爲、社會の爲、文化建設の一大原動力となつて、個人に於いては人格が善良になり、國家社會には有益なる貢献をする人を造成して行くのが法華經の目的であり、その事を理解するのが正しき法華經の信解であります。日蓮聖人が「立正安國」といふことを生命に代へて叫ばれたのもそれが爲であります。諸君は緣あつて法華經の信解に近寄つたのであるから、どうぞ一般の間違つた人々と同じやうな態度でなく、最も從順に敎の精神を了解して、正しき信解に進み行かれることを希望する次第です

（此の御講演は本多上人第三回忌法筵に際し、特に御多忙中の閣下にお願ひした憶出の深いお話しである。　文責在記者）

日生上人と統一の大敎

（三敎會同の眞相）

前鐵道大臣　床次竹二郎

今日の御催しに方りまして、私も本多上人に知遇を辱う致して居つた關係から、何か御話を申すやうにといふことで、それは此席に御在での方、或は御記憶の方もあるかと思ひますが、明治の四十五年でありましたが、三敎會同といふものを、その當時私が內務次官を勤めて居りまして、發起して催したことがありまして、その當時のことを物語ればいゝからといふことでありました。即ち上人の思出話にならうかと思ひまして、それならば申上げようとお返事致したのであります。印刷物を頂戴しましたのに「日生上人と統一の大敎」とありましたが、さういふことになるのか私は知りませぬ。私はたゞ三敎會同當時の思出話を申上げる積りで參りました。

三敎と申すのは耶蘇敎と神道と佛敎と、この神・佛・耶の宗敎家諸君の會同を催すといふことであつたのであります。只今では宗敎家同士がお寄合になるといふことは、何等不思議もないことであらうと思ふのであります、けれども、その當時には非常な衝動を——若しひどい形容詞で言ふなら、天下引繰

返る程の大衝動を惹起したのでありました。元々さういふ考はどこから起つたかと言へば、極く簡單なことであつたのです。一番その當時私の頭に感じて居りましたことは、丁度日露戰役の後でありました日露戰役中は私は或る地方の知事を勤めて居りまして、よくその當時の事情を見ますといふと、平生は神樣も佛樣もない狀態でありまして、けれどもその當時は心から神詣りもあれば佛參りもあつて、神佛が世の中に出て活動せられることが、斯くも人間が本氣になるといふと、あるものかといふことを、深く頭に感じて居りました。平生は「何だ今時分お寺參りか」と言つたり、或は神樣の前を通つてもお辭儀もしない人間が、あの時だけはモウ皆心からお詣りをして、神佛が躍つて出られたのでありまして、誠に人間の本當の本はこゝにあるかといふことを深く感じて居つたのです。

さうして又一方に於ては、御承知の通り、吾々の先輩が御維新の大事業、大改革を致したのでありましたけれども、その當時私共子供心に聞いて居つたのでは、廢佛毀釋といふことが行はれた。又廢佛毀釋その位の元氣がなければ、恐らく彼の大改革といふものは出來ないものであつたでせう、勢の趨るところは先づさういふところまで思切つてやつて、初めて大改革が出來るのだらうと思ひますが、しかしその後のことを考へますと、形而下と申しますか、物質文明と申すか、諸般の文物制度は非常に進んだのであるけれども、所謂神佛——精神界から見れば廢佛毀釋の儘でその當時まで大體來て居つたと申していゝのぢやないかといふ考を持つて居りました

そこで段々世の中はむづかしくなり、思想の混亂もどうしたものかといふ議論も起るやうな時になりまして——これは私共俗で言ふ言葉でありますから、そのお積りでお聽取を願ひたいのですが、神佛をこの世の中に引張り出して來て働いて頂戴する、

（笑）これがやはり一番いゝ途だらうと考へた。そこで見渡すところ、廢佛毀釋の儘で來て居るその當時でありますから、宗教の權威といふやうなものも餘り認められぬやうに考へました。そこで先づ神佛を一つ、天の岩戸を押開く譯でもないが、吾々の社會に躍り出て貰つたら宜からう。それにはどうすることが宜いか、兎も角これは宗教家の大會同を催すといふことが一番いゝのぢやないか、由て以て政府の宗教に對する態度もこれで決つて來やしないか。又宗教と教育の間も、私共が見て居つたのでは、ドウモ宗教といふものが輕く視られて居つた結果でありませうか、世の中の教育家も、宗教には餘り重きを置かれぬ、教育家であつて宗教のことを口にするのは、何だか餘り大ビラには言はれないやうな考を持つて居られるのではないかと、これは間違つた見方であるかも知れませぬが、さうも思つたのです、それから又宗教家同志は案外偏狹なもので、角を突合せて居られるが、神樣や佛樣はそんなものではない國家民人の爲には何でも一つになつて働くといふことが神樣や佛樣の心でありさうなのに、「イヤ耶蘇教は怪しからぬ」「神道は今時分どうだ」「佛教はドウモ眠つて居るぢやないか」と、お互にそこが圓滿に行つて居らぬやうに思ひました。

そこでそんな話を或る時申したのが、此席に居られる姉崎博士、それから今歸られました佐藤（鐵太郎）將軍、それに此席に居られる御老體の矢野さんその當時は檢事をして居られた、それから小笠原子爵もあつたと思ひますが、マア專ら今曉の日生上人が主になつて居られた譯でありまして、それは善い事だから是非やつたが宜からうといふやうな話があつて、そして大變に蔭になつて働いて下さつたのでありました。私は仕事はモウやりつ放しで、今日でも日記などつけたことはないのですが、それが三教會同に關する書類だけは、誰が拵へて呉れたか、斯

ういふ風にチャンと遣つて居る。それで何かあつた筈だがと思ふて調べて見た所が、この位の柳行李に一バイある、それで本多上人の手紙も四通か五通位ありませう、姉崎さんの手紙なども、大變その當時成行を心配されたのがこゝへ出て來ました。（拍手）

當時私は元老方はどんなものかと思つて、これをやるに就ては、山縣公爵や、大隈侯爵や、松方侯もお訪ねしてお話しました。皆老人方も贊成されて、大隈侯も贊成されました、大隈侯はお自分のお手紙ではないでせう、書かれない人だと言ひますから、（笑）が名前だけは記した手紙が來て居る、さうして大谷さんの所に斯う言つて手紙を出したら、斯ういふ返事が來たといふやうなことが書いてあります。要するに老人方も、俺等は廣佛毀釋はやつたが、その後始末は本當は着けてない、それだからお前がそんな事をやるなら至極結構だからやつて見たら宜からうといふやうなことであつたのです、幸ひ今申上げた諸君が後ろに居つて、蔭から引張つて居られるものですから、氣丈夫になつて先づ始めて見たのですが、始めて見た所がこれは容易ではなかつた。日も何も覺えませぬが、手紙で推して見るといふと、一番初めの手紙は十一月の末に日生上人から來て居る。それから十二月になつてから、何かそんな企があるといふことがボツ〳〵漏れて來た。漏れる筈ではある、姉崎君の手紙が此處にあるが、「斯ういふところにも、あゝいふところにも話をして見たが、皆それは贊成だから、大概これは宜からう」といふやうなことを言ふて來て居る。それで同じことなら喧嘩してはいかぬのですから、皆心持好く寄合はなければ、折角寄つたゞけの威力を發揮することは出來ないのですから、マア今日で言ふ意思の疏通だけは愈々その發表をする前にしたが宜からうといふ積りで、即ち姉崎博士や上人などが、アッチコッチ隨分やつて呉れられたのです。けれども中々〳〵これはうまく行かぬ。それで十二月の手紙では、何だかエライ私がグズ〳〵して居るやうに考へられたと見えて、エライ督促するやうな、叱るやうな手紙まで來て居る（笑）早くやらなければ、グズ〳〵して居つてこれが判つて來た日には、アッチからもコッチからも反對が起つたりなんぞしてやり切れやせぬ、それだから早く打出してしまつて、やるところはやつたが宜からうといふやうな手紙までも來て居る。ところがやる者になればなか〳〵さうは行かない。それは私がさうやつたことはやつたけれども、案内狀はやはり内務大臣が出さなければ宜くない。そこで私が企てゝ、内務大臣の名前を以て皆を御招待して見た所で、參り手がなかつたら、チョット面目上困る（笑）。でありますから、さうは言はれてもやはり念には念を入れなければならぬのでありますから、十分念を入れて、到頭愈々開いたのは二月の二十五日です。それですから、十一月から二月まで斯ういふ譯で、何でもないやうにお考でありませうが、その寄合を催すといふだけに、それだけの日子を要したのですから、如何に議論もあり、面倒であつたかといふことは、マアそれでも御承知下さるだらうと思ひます。

今から考へて見ると、宗教といふものが、若し極端な言葉で言ふなら、餘り世の中で頭に持つて居る人のない時に、三教會同と言ふから、「一體何をやるのか」と、餘程頭を刺戟したものと見える。新聞でも雜誌でも反對の方が多い、反對のことが新聞雜誌に出れば、それは斯うしたものか、あゝしたものかと考へもする、なか〳〵さうたやすくやり切れるものぢやない。それで私の友達などでも手紙を寄越して居る、「ドウモ斯ういふ議論百出の時に、強ひて言ひ出したからやらねばならぬといふものではないぢやないか、お前は禪なども幾らか聞き噛つて居るのだから、禪機に依つて斯ういふ時はモウ綺麗サッパ

リと抛つてしまふが一番いゝぢやないか」（笑）なんといふ手紙も來て居る。たゞ惡口ばかりならいゝけれども、脅迫の手紙も少なからず來て居る、面白いのは私の同情者の一人である高島米峰君なども內務省へ來られて――安藤正純君と一緒だつたか、そこで議論が始つて、日暮時になつても先生方歸らずにやつて居る、仕方がないから他の役人には「ドウゾ先へ歸つて下さい」と言つて、私と三人殘つて議論を闘はして、到頭日が暮れて暗い所でやつて居つた（笑）その時の言ひ分が、マア外にもありましたらうけれども、今でもチョット覺えて居るのは、「貴樣は役人ぢやないか、役人の肩書のある奴が斯んなことをやるのは怪しからぬ、やるなら浪人になつた時にやるが宜からう、それなら聽いてやる、けれども役人の肩書を持ちながらやることは怪しからぬ」といふ議論である。それから私が「それは一應尤もだ、けれども僕が平浪人になつて斯ういふことを企てゝ誰が相手にして呉れるか（笑）マア小さな肩書でも內務次官といふ肩書があるから、これが相談の種になるぢやないか、やらうと思へば今やる外ないぢやないか、やらぬ積りならそれは宜からう、俺はやると決心して居るから、肩書を利用してやるが宜いぢやないか」といふやうな議論までしたものです（笑）。

それから近角常觀先生などは私の宅へ押掛けて來て、夜通し議論をして、到頭夜が明けてしまつた（笑）それは向ふの方は本物だし、私の方は附燒刄だから議論は敵はないけれども、斯う言ふのです「今そんなことをやられては大變に信仰の動搖を來す、それだからこれは止めて呉れなければ國家の爲にならぬ」と言ふ。それから私は素人だから「君等の信仰といふものはそんなことで動搖するやうな信仰ですか（笑）。それで動搖するやうな信仰では衆生濟度は出來ないぢやありませぬか、私は貴方と反對だといふ者でも、それならモウ相手にせぬと言はずに、やはり濟度して呉れなければ、宗教の本當の道ではあるまい」（拍手）當つて居るか、當つて居らぬか、さういふ議論を夜通しやつたやうなこともありましたそれだから雜誌といふ雜誌、新聞といふ新聞、それは酷く扱き下されたものです。

しかしながら根本をお話すれば、最初申上げた通り、極めて簡單な、私から言へば純なことで始つて居るのです。それで少くとも宗教に世人の注意を惹いて、神佛をこゝに一つ活躍せしめやうとするのには、この位の會を催さにやいかぬ。それは今日の結果から見れば、確にその効果はあつたと思ふ。何しろ天下中を引繰返すやうに騒がしたのですから、確に神樣も、佛樣も、或はゴッドも出て來て、「やるナ〳〵」とか、「やれ〳〵」とか言ふたことだらうと思ふ。（笑）それだけは効果があつたものと私は思ひます。宗教といふものが捨てられて――と言つては語弊があるけれども、餘り重きを置かれずに居つたのに、エライ宗教は喧しいものだといふ注目を惹いた効果だけはあつたであらうと思ふ。

それから又、是は會同であるものを、强ひて合同だと言ふて、「各々教義があるものを、合同なんといふそんな馬鹿氣たことが出來るか」と言ふて、さうでないのにさう言ふて反對をして混ぜくられたのです。ところがこれは如何に素人の私でも、合同はさうたやすく行かぬことは知つて居ります。そんな難しい事を初めからやらうとは思はぬ。しかし各宗派が互に嫌な顏をして、同じ日本人でありながら居る、といふことは宜くないことだから、教義が違つても國家の爲に、所謂日本人の爲にするといふことであれば一つでなければならぬ、即ち同じ高嶺の月を見ることは一つでなければならぬから（拍手）登る道は違つても、一つ頂上まで登つて月を見ることは差支ないぢやないか。それで寄合をしてそんなやうな氣分を持來すといふことは宜からうぢやないかと思ふ

た。それでこれは合同ではない、會同で、さういふ趣意で催したのに、それも大變に議論がありました

又あの時には耶蘇教の人は何分勢力が少い。動もすればあれは邪宗だとか何とか、まだ明治四十四年五年の頃であるから、そんな風もあつたと思ひます兎も角日本には餘り濱がらない。又耶蘇教の人でもその態度が私等が考へても惡いと思ふこともあつた神樣の前を通る時に禮をしないとか、或は偶像だから拜しないとか……。私共から見れば、日本には日本の自ら風儀がある、鄕に入つては鄕に從ふといふことは、私は耶蘇教でもあるべきものだと思ふ。愁じつかの耶蘇教はさういふことを言ふかも知れぬが本當の耶蘇教はさうではなからうと、素人考へで考へて居つた。それであるからやはり政府としては餅まぬ考を以て、同じやうに、神・佛・耶同等の態度で臨むといふことが、政府の宗教に對する態度であらうと考へた、それでこれは一樣に三教會同として催した譯です。勢力の少い耶蘇教の人は議論もありました、あゝいふ時は議論をせにやならぬ人もあるから、議論もありましたけれども(笑)大體から言へば耶蘇教としては買つて出べきところであつたと思ふ、それでやはり大體は贊成をせられたのであつたのです。

それから最もひどかつたのは、日本の國民道德といふものは教育勅語があつてこれにチャンと定つて居る、それに何ぞや、國民の精神作興などゝいふやうなことに關聯して、宗教を引出して世話を燒くといふことは何事ぢや、グズ〳〵言へば教育勅語に反したことを彼奴はやり居るものだ、あの役目に置いてさういふ事をさせて置くといふのは怪しからぬぢやないか……、一つ間違ふといふと首でも馘られさうな議論も起りました。(笑)その時の世話役は姉崎君であつたか、誰であつたか私はよく知りませぬが、そんな結果で、到頭大學の學者達が、「兎も角床次を非難する前に、一遍虛心坦懷に彼の話を聽いてやらうぢやないか」といふことで、大學の御殿で今の博士、先生方が集つて、申さば床次諮問會が開かれた(笑)これはエライことになつた、しかしながら行つて考へた通り言はうぢやないか、それでもいけなければどうも仕方がないけれども、私に野心も何もないのだから、それは自ら通ずる筈だと思つて行つた「どういふ譯で斯ういふことをやつたか」といふから、「斯ういふ考で、斯ういふ譯でやつて居るのだ、それが何が惡いか」といふ位の程度でやつたものです。その時は加藤老博士がまだお存命でして、加藤博士は耶蘇教に反對の方であり、佛教の方にも必ずしも好意を持つて居られなかつたやうですが、「全體今の佛教なんといふものが……生臭坊主が何が出來るか(笑)あゝいふものを相手に國民道德の彼此れといふ奴があるか」と言はんばかりの調子であつたけれども段々コッチの考を述べたのです。杉浦重剛先生も來て居られた、重剛先生は「それは宜からう全體各宗教は國家の爲に盡すべきものである、又盡させるのが國家の責任である」といふやうなことを言ふて賛成して居られた。そんなやうなことで私も包み匿さず、ありつたけ言ふたところが、議論は必ずしも是認された譯ではない、しかしながら「アイツは別に野心があつてやつて居る譯ではない、マア天下の爲になるだらうといふ考でやつて居るのだから、そこは憎むべきではないぢやないか、さうして出て來いと言へば出て來て、曝け出して何でも言ふ今の官僚にはチョット珍らしいタイプの奴だから、マア見逃して置け」といふ風なことで、諮問會は釋放されたのです。(笑)

それでだん〳〵準備が進まして、二月の二十五日に原内務大臣から各宗管長に宛てゝ招待狀が行つた譯です。幸に各宗派皆來られました。東本願寺が來るとか來ないとかいふ議論が大分ありましたけれ

ども、結局ドナタか見えられたので、皆來られた。神道の方も神道十三派が皆來られた、基督教の方も七派あつて、その代表者みな來られました。その集つた時の樣子が中々面白い、袈裟を掛けた衣もあれば、金襴の和尙さんも居れば、又シルクハットなり山高帽なりのフロックコートも居る。さうかと思ふと又紋付に仙臺平の袴を着けた人も居るといふ譯でチョット見られぬ景色であつた。(笑)それから御馳走はどうかといふと、精進料理もあれば、西洋料理もあるといふやうな譯……(笑)それで內務大臣から挨拶があつて、集つて見れば何も耶蘇教と佛教と始終喧嘩する譯でもないし、神樣は素より何でも御座れで、これは日本の初めからの神樣で、佛教でも、耶蘇教でも、何んでもかんでも皆容れて今日まで來て居る我國のことであるから、流石に顏を合せて見ると、誰もさう角突き合せて喧嘩する人はなくて、極めてマア和氣藹々とでも言はうか、ニコ〳〵した形で、その會は原大臣の挨拶があつて濟んだのであります。

こゝで一言「私」が感じたことを申すと、原といふ人は偉い人でした。私は原さんに引立てられて今日に參つて居るのでありますが、この事を企てゝから前に申すやうに議論百出、原さんのところにも「ナゼあんな事をさせて居るか」といふやうなことを隨分言ふて來たのです、けれども何んにも取合はぬ、全く私のする通りに委せた。愈々お膳立が出來たといふ時に出て來て、今のやうに挨拶をされる。これはマア俗世界のことですが、人の長官たるにはこれ位のことがなければならない、私は始終感服して居る。洵に度量の大きな、下の者が働けば働く通りにさして、そしてチャント必要な時だけは、愈々これが締りだといふ時には先生が出て來て挨拶をして括りを付けて行きます。

さういふやうな譯でなか〳〵やる者はその當時は

骨が折れた。そこでその會同があるといふと、やはりその儘では終はずに、二十五日の會合で、翌二十六日には神道各派、佛教各派、耶蘇教各派、皆それ〴〵會合をされて、折角斯うやつて集つたが、たゞで散會することもいかぬから、何かこれはせにやなるまいといふことに自然なつた譯です。さうして各々會合がありまして、その結果決議が出來た譯です色々各宗から出たのですが、それを段々妥協して

我等は各々その教義を發揮し、皇運を扶翼し、益々國民道德の振興を圖らんことを期す。

我等は當局者が宗教を尊重し、政治、宗教及び教育の間を融和し、國運の伸長に資せられんことを望む。

斯ういふ決議が出來たのです。それから越えて二十八日になると、今度は又これを好機會として宗教家、教育家、思想家の會合が催された。即ちその世話役はやはり姉崎博士などが一番音頭取りで、皆御相談になつて出來た譯でありますが、上野の精養軒で二百名から集つて懇親會が催された。その時色々話がありましたが、しかし其處へ集まられた諸君は素より同意だから集まられたのだから、孰れも「あゝいふ事は善い事だから、これからやはりさういふことで盡力しやうぢやないか、宗教家も、教育家も同じ心で行かうぢやないか」といふことになつたこゝに當時の記錄がありますが、その中の一例を言へば、宗教家は勿論のことですけれども、井上博士なども「日本開闢以來珍妙の會合である、歐羅巴にも亞米利加にも到底見ることは出來ない」、それは見ることは出來ない筈だ、歐羅巴には神道などはないのですから(笑)さういふやうな話も出て居る。それから伊澤修二さん、あの人も隨分嚴しい人のやうであつたが、「自分は教育家として、初めより床次氏の計畫せる三教會同に贊成の意見を有して居つた、而も床次氏の計畫を以て頗る大膽なりとして、その成

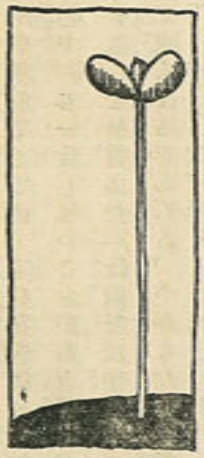
功を疑ひつゝあつたにも拘らず、美事に仕畢せられたのは敬服の外なし」。こゝでは大分褒められるやうになつた。（笑）

いろ〳〵議論はありましたけれども、私はさう思ふのです、あれから以來、宗教といふものは、その前後に比較したら、確に神佛は世の中へ躍つて來たと思ひます。これは自書自讃ではあるまいと思ふのです、といふのは斯ういふ決議などがあつて、引續いて各宗派管長に於かれては配下に向つて、「この度斯く〳〵々々なる會をして、斯く〳〵々々の決議をした、就てはこの決議の實行に爾來努めたいと思ふから、皆その心得で……」といふやうなことを達せられたのである。その達せられたことがどれだけ眞實に實行されたか、そこは私は知りませぬけれども、兎に角斯ういふことになれば、相當な効果があるべきは私は疑はぬのです。それは各宗教皆さうだらうと思ひます、又教育家も「宗教などを今引張り出して何を全體やるのだ」と中には思つた人もあつたらうと思ふ寄合つて見たところがナニさうでもない、何も不思議なことをやるのではない、虚心坦懐に言へば、あるべき事をやつて居るだけでありますから、こゝに圖らずも二十八日の上野の精養軒の會合といふやうなものも盛に出來たことゝ思ふのです。また學校の先生が耶蘇教を奉じやうと、佛を奉じやうと、神道であらうと、チョットも差支へない。これは餘り言過ぎるかも知れぬが、それまでは教育家がお寺參りをして說教を聽くなんといふのはどうかといふやうな考へも、中にはあつたのではないかと思ふ、廢佛毀釋の後を受けては……、私はさう思ふのですが、さういふところは確に和らいだ。政府と各宗教の間もこゝに和らげられて來たし、政府の宗教に對する態度、殊に耶蘇教などでは餘程壓迫を加へられるかの如く、ドウモ僻んで居つたことは事實だらうかと私は思ひます、その僻みは取れたらうと思ふのです。宗教家同志でも、教義は違ふが同じ日本人だから、國家の爲に働く時は差別のない譯だから、食はず嫌ひといふことがあるけれども、マアさういふやうなことは必要はないといふことは、實際接して見て案外これは融けたらうと思ふのです。又宗教と教育の間でもさうだらうと思ふ、國民の教育と言へば「國民道德は教育の受持だ宗教なんぞは何だ」といふ譯に行かない、そこのところは餘程私は空氣が緩和されたものと思ひます。

國内に於てはその通り、これを國外から見れば、大變外國からも手紙も來て居ります。私は横文字の手紙は讀みませぬが、三十通ばかり來て居るから、い〳〵加減外國人の間にも、日本は何か妙なことをやつたといふことだけは刺戟を與へたものと見える。向ふの新聞雜誌にも無論アッチコッチに載つて居ることは、切抜きを送つて來ました。ドウモ善い事だけは頭に妙に殘るものですネ、その當時コッチが苦しんで居つたからだらうけれども、或る外國新聞で「日本の西園寺内閣は大變リベラルな、宗教を理解した内閣である」といつて書いてありました。（笑）これはい〳〵加減、外交的に見ても善い仕事であつたと自書自讃しても差支へないでせうと私は思ふのです。況んや朝鮮などでは、隨分宣教師と朝鮮總督府の間は必ずしも一致しないことがあり得た、私は或時斯ういふことを言ふた「政治では朝鮮人の心を東へ向けて來られるであらう、しかしながら精神ではこれを西に向けて導く者がある時に、何として拓殖政治をおやりなさるか」といふことを或る長官に私は言ふたことがある。確にこゝらにも影響は私はあつたと思ふのです。その効能を述べ立てた譯ですが、出來上つて見ると今日は笑ひ話で、さうして確にやつたゞけのことはあつたと私は思ひますが、やり上げるまでの間は、何しろ十一月の幾日頃から話が始つて、漸く二月の末に會を開くやうにな

つたといふことは、その間に容易ならざる苦心慘憺したものがあるといふことはお諒解下さるであらうと思ふ。

その時に當つて前申上げる如く、私を鞭撻すると言ふか、モットひどい言葉で言ふなら、私を人形に使つて躍らせた人は、此席に居る姉崎君だの、或は老檢事の矢野君だの、佐藤將軍だの、それから言へば最も性質の惡いのは本多上人である。（笑、拍手）手紙が來て居るのに依ると、ドウモ私がやり掛けて未だに一向招待狀も何も出さないで、グズ〳〵して居るが、腰折れでもしたのおやないかといふやうな手紙が來て居る。その位の勢で後楯があつたから、兎も角やり畢せた譯でありました。チョットしたことでありますけれども、若しあの事が幾分か宗教の上から見、又國家の上から見、風教の上から見て、幾分でも役に立つたといふならば、その功は即ち本多上人のやうな影で躍らせた人に在つたと申していゝ譯であります。（拍手）今日は丁度好い機會でありましたから、斯ういふ風に打開け話をして、故人の德を皆樣に申上げて置く次第であります。（拍手）



本多上人の遺業を奉じて

（前號三十頁下段參照）

文學士　小林一郎

私は早く上らなければならぬのでございますが、外に一つ約束がありましたので大變に遲れまして、先輩の方々にお話を願つて、しかもそれを餘り多く拜聽することが出來ませぬでした、深くお詫を申上げます。實はモウお二人のお話があつたので、私から何も申上げる事もないと思ひますが、本多上人のお德を慕はれた諸君が新しく財團を作られて、その財團に於て法華經及び日蓮聖人の教義の宣傳を行はれることになつて、そのお仕事の、一部分を私がお手傳をすることになつたものですから、そんなやうな關係から、今日は私が何か一言しないと少し體裁が惡いといふやうなことで、取敢えず出ました譯であります。本多上人の御生前にお始めになりました事を、私共のやうな者が受繼ぐことは無論出來ないのでありますが、しかしこれを受繼ぐのは、これは苟も法華經を信じて居る者全體の責任であるのでありますから、私はその責任の何百分の一、何千分の一を果せば、故人に對して申譯は相立つことであらうと存じてお引受をしたのであります。

ところで本多上人がどういふ事を一體御一生の間になさつたかといふことを、一言で申し盡すことは出來ないと思ひますけれども、假に私にこれを言ふことを許されるならば、本多上人の一生涯に力を注がれたことは、東洋固有の思想を發揮して、西洋人のまだ行き着くことの出來ない一番高いところまで國民を引張つて行くといふ事であつたと私は思ふ、

外に色々言ひ樣があるけれども、結局それなんである。西洋人に出來ない事がある。それはお互に善いところと惡いところがあるから、東洋人に出來ない事を西洋人がやることもある、しかしながら今までの西洋人ではどうしても出來ない事がある。これは東洋人たる吾々がやらなければならない。これは今までいろ〳〵な會合の時に申した事で、既にお聽き下さつた方もあるかと思ひますが、私自分の考に依るといふと、大體西洋人と東洋人と較べた時に、ドチラが偉いか偉くないか別問題として、人間としての性質が違ふのです。コッチから見ると、西洋人といふものは恐ろしく鼻が高くて、眼が凹んで、ヘンチクリンなものに見える、天狗と人間の眞中どころ見たいに見える。（笑）ところが西洋人に言はせると「日本人といふ奴はイヤニ鼻が低くて、眼が細くて始終眠て居るやうだ」と言ふ。（笑）私などもその標本だらうと思ふが、向ふから言はせると「始終眠つてるやうだ」と言ふ、コッチから言ふと「天狗のやうな奴だ」と言ふ、ドッチがどうだか分りませぬが顏が違ふ通りにやはりその人間が違ふ。各々善いところもあり、惡いところもある。ところが物事を考へる場合に於て何處が違ふかといふと、根本を言ふと、西洋の者はものを分けるのが巧い、これはドウモ感心してしまふ、ものを分解する力を持つて居る見分をする力を持つて居る。例へば此處に机が二つある、吾々が見ると同じ机だ、西洋人が見ると違ふと言ふ、「この角がコッチは尖つて居る、向ふは丸いぢやないか」「このところがコッチは少し出つ張つて居つて、コッチは引つ込んで居るぢやないか」斯ういふやうに違を見る。何でも物の違ふ所を見て二つに分け、三つに分け、四つに分けるといふ風に分けて行くことは、これは西洋人が偉い、實に驚いたものです、專門の言葉で言ふと分解の力であります。それで、さういふやうな眼で以て物を見るから、吾

〳〵の周圍にあるものゝ違を一々較べ合せて、さうしてこれを說明して行くといふやうなこと、言換へれば今の所謂科學的研究であります。これは西洋人が偉いのです、確にこれはまだ〳〵日本が西洋の眞似をして少しばかりやつたといつて、今の位では迚も及びはしない、これから當分の間は向ふの眞似をしなければならぬ。それは西洋人の方が確に偉い、三つに分け、四つに分ける。獨逸のヘーゲルの本などを見ると、何だつて斯んなに餘計に分けるかと思ふ位に分けて居る。だからこの長所が段々と發揮されまして、昔の希臘の時代から色々な學問が興つて、近世になると科學が進んだ、これはモウ西洋人の長所を十分に發揮したものである。

ところがさういふ風に物を分けることは上手だけれども、サアこれを纏めて「要するに」といふことになると、西洋人は下手なんです、「要する」にがなか〳〵出て來ない。分けて分けて又分けて、それで一生お終ひ（笑）だから吾々がヘーゲルの本などを讀むと、何を言つて居るのかと思ふ、これは書いた奴の頭が惡いか、自分の頭が惡いか、ドッチかだらうとック〳〵思ふ。さういふところは又彼等の短所がある。

ところが支那の人や日本の人は、さういふ物を分けることは西洋人に及ばないが、これを纏めて「要するに」と、斯うやるのが巧い、急所を摑へることが巧い。だから西洋人が千言萬語を費して言ふ事をコッチは一言で言つてしまふ。殊に日本人はそこに長じて居る、そこで日本に發句だの川柳だのといふものが出來て來る。西洋人にはあれは出來ない。日本の發句を西洋の語に譯して見ると分らなくなつてしまふ。

古池や　蛙飛込む　水の音

といふ發句を西洋の言葉に譯したらどうなるか、「そこに一つの古池がある、さうして蛙が飛込んだ、ポ

チャーンといふ音がした」（笑）と言つても何でもありやしない。そんな事は西洋人には駄目なんです、これは日本人が巧い、いろ〳〵な千百言を費して言はなければならぬ事を、短い言葉でパッと言つてしまふ、これは實に日本の特色を現はして居ります。

だから西洋人に言はせると、東洋の思想といふものは極めて散漫である、言換へれば粗末だ、斯う言ふ。言葉なんかも日本語といふものは、如何にも西洋人に言はせるとルーズな、區別の付かない言葉だ斯う言ひます、尤もです、松の葉があをいと言ふ、空があをいと言ふ、あの人の顔色があをいと言ふ、あをいと言つて松の葉のやうな顔色をして居る人がありますか。（笑）如何にあをいと言つてもこれは違ふ。松の葉の色と、空の色と、人の顔の色のあをいのはまるで違ふ。ところがそれを日本人は一口に、「あをい」と言つてしまふ。英語に直したら大變な話、松の葉のあをいは Green で、空の色のあをいは Blue、人の顔のあをいのは Pale と言ふ。「彼奴はグリーン・フェースだ」なんと言つたらビックリしてしまふ（笑）。さういふところはコッチが面白い、そんなに細かにやらずに一口に「あをい」と言つてしまふ。向ふの人が色々に言はなければならぬのを、コッチは一つで決めてしまふ、だから面白い。私は何時でも言ふが、春の月の晩のことを「朧月夜」と言ふ、この朧月夜といふことは、英語だつて、獨逸語だつて、佛蘭西語だつて言へない、言はうとするならば何十の言葉を並べなければならぬ。朧月夜といふのは、たゞ月がボンヤリして居ると言ふのではない、月が霞んで居て、花の香が匂つて、風がソヨ〳〵吹いて、靜かな、非常に氣持の好い晩のことを朧月夜と言ふ。そんなことは英語では、言へない、何と譯するか、朧ろといふことはボンヤリして居るといふことだ、ボンヤリして居るといふことは、英語では字引を引いて見ると、Ambiguous と書いてある、「アンビギュアス・ムーン」なんと言つたつて朧月夜といふ感じは出やしない。さういふやうなところは日本人が巧い、大事なところをパッと摑へる西洋の人は物を分解するのに長じて居る。吾々の周圍の自然界を出來るだけ細かに研究して、その研究した結果を漸次又それを實際に應用して、所謂科學的知識の上に立つて國の文化を進めて行く、これは西洋の長じて居るところである、吾々もお手本としていゝ。東洋の人間は、人間の心といふものは恐ろしく複雜なものでありますが、その複雜な人間の心の大事なところを摑へて、「要するに人間は斯うしなければならぬ」といふ、その急所を捉へることが上手だから、そこでお釋迦様が印度に出ても、孔子様が支那に出ても、「要するに人間としては斯うしろ」と急所をチャンと示す。これは西洋人に出來ない、各々長ずる所がある。

それを明治の初めから西洋の物眞似をしたものだから、西洋の本當の眞似も出來ないで表面だけ眞似て置いて、さうして日本の古いものを捨てゝしまつたのです。それが今日に及んで居る、今の日本の文化といふものは、日本の固有のものを捨てゝしまつて、西洋の眞物を學ばないから、何が何やら譯が分らない、たゞ西洋の表面だけ眞似て居る、しかしながらそれは日本人の頭が惡いからではない。何だか學校の教場の講釋のやうになりますが、要するに西洋の近世の文化といふものだけ考へても六百年かゝつて居る、日本の鎌倉時代に近世といふ時代が始つて、それから國と國とが競爭して今日の文化を作り上げた。その六百年掛りのものを、日本が三十年位で皆眞似をしようといふのですから、幾ら日本人が偉くても無理です、西洋人の二十分の一でやらうといふ（笑）、無理です。その無理をやつた、だからいゝ加減になつてしまつた。皆いゝ加減である。吾々が牛肉を食ふのに、牛肉が日本人の身體に適するか

適しないか、そんな事は考へないで、「西洋人が食ふからコッチも食はうぢやないか」といふので食つた（笑）たゞそれだけの話。昔はチョン髷を結つて居つたのを斯ういふ普通の髪になつた、これはチョン髷が衛生上惡いといふのでも何でもない、「西洋人は斯んなものは附けてやしない、ぢやア斯つてしまはう」（笑）といふので斯つてしまつた、それだけの話。何でも西洋の表面だけ眞似た。今晩はお若い方も大分居らつしやるが、私共は明治の初年に生れたので學校教育を受ける頃には、何でも西洋の眞似をすれば偉いと思つた。何時かも話したが、東京の築地といふ處には西洋人ばかり居りました。その築地を歩いて來た人が家へ歸つて來て、「ドウモ西洋人は偉い逆も敵はない」と言ふ。「何故敵はないか」「イヤ西洋人は五ッ六ッの時からモウ英語が出來るのだから、逆も敵はない」と言つた（笑）さういふ時代がある。英語の出來る人は皆偉いと思つて、築地を歩いて見ると、西洋人の子供が英語を喋べつて居る、驚いた向ふは五ッ六ッから英語が出來るのだから、逆も競爭しても駄目だ、斯ういふやうに思つて居つた。さうして日本の古いものをスッカリ捨てゝしまつた。西洋の物眞似も本當には出來ず、と言つてコッチの固有のものも捨てゝしまつたといふやうな狀態であります。

そこでその古いものを皆捨てるといふ時代に於て佛教なども捨てゝしまつた。先刻もお話があつたやうでしたが、廢佛毀釋といふやうなことで、「佛教を皆捨てゝしまへ、お寺などは苛めてしまへ」斯ういふやうなことで、私共は子供の時に微かに憶えて居りますが、古いその道の方は御存知でせうけれどもお寺にはお寺としての存在を許さないことになつたそこで芝の增上寺の山門の二階の眞中のところに、小さい鳥居が立つたことがある、どうしても教を弘めるには神道でなければいけないといふので、申譯に鳥居を立てた（笑）。增上寺も腰拔けだが、それを立てさした方も隨分横暴だと思ふ、けれども實際に於てさういふ事をやつたものです。今考へればおかしい事ですが、そんな時代があつた。「佛教なんといふものは日本の古いものゝ中でも役に立たないもので、これは逆もいかぬ」斯ういふことになつて、隨分佛教の方ではひどい目に遭つた。

ところが、この間も或る會合があつて、その席上で私申したのですが、明治の以後に於て佛教が排斥されたといふことは、果して當時の政治家や何か卜眼が見えなかつたのかどうだらうか。佛教を排斥して、宗教といふやうな大事な事を認めさせないで教育をして來たといふことの全責任を、當時の政治家や何かに負はすべきものであるかどうか、これは大いに考へなければならぬことゝ思ふ。私は思ふに成程佛教を排斥した政治家も惡いけれども、排斥された佛教の人々その者にも大きな責任があるといふことを考へなければならぬと思ふ。本當に善いものならば、誰が排斥したつて國民が承知しませぬ。さうでせう、日本人は米を食べて居る、若し茲に總理大臣が出て來て、內務大臣が出て來て、外務大臣が出て來て、皆一緒になつて、「日本人はパンを食へ」といつて演說したつて、米を食ふ者はやはり米を食ひます、（笑）「米を食はなければ殺す」と言つたらそれは命懸けならパンを食ふかも知れないけれども（笑）大概のことならやはり米の好きな者は米を食ふそれと同じやうに、佛教が本當に日本國民の間に理解されて居つて、佛教に依らなければ救はれないといふことを、日本國民全體が信じて居つたら、政治家が何と言はうが、大臣が何と言はうが、佛教は捨てられなかつた筈です。それを政府の命令に依つて捨てられたといふことは、佛教を宣傳する人、佛教を信じて居る人の自分達の信仰が眞物でなかつたといふことを證據立てゝ居る。（拍手）これは役人の惡

口ばかり言はないで、お互が反省しなければならぬ今日私なども少しばかり佛教を喰つて居りますが斯ういふことは佛教をやつて居る者としては、お互に考へなければならぬことであります。

一體宗教といふものが墮落する時には、どういふ風にして墮落するでせうか、これを私考へて見るに、教といふものは非常に深い根柢を持つて、さうして非常に手近いところに役に立つものでなければ教ではない。根柢を言へば非常に深い、天地人生の本當の深い意義に根を持つて、さうして其の根を持つた教が、毎日のお互が御飯を食べる間、お茶を飲んで居る間に役に立つ教、それでなければ教といふものにはならない。たゞ深い根柢を持つて居るだけで役に立たないならば、それは一つの哲學ではあるだらうが、人間の教ではない。それから役に立つだけであつて、深い根柢がないならば、それは又考の深い人間には捨てられてしまふ。「ナゼ親に孝行しなければならぬか」「何でも孝行しろ」「ナゼ日本の國が有難いか」「何だか知らぬが有難い」……それでは考の深い人間には捨てられてしまふ。だから本當の宗教としては、最も深い根柢を持つて居つて、さうして日常の上に役に立つものでなければならぬのであります。これが宗教として一番大事なことで、「蓮華の水に在るが如し」とお經にあるのはそれである、深いところに根を持つて居つて、さうして開いた花は高いところに咲いて居る、それでなければいけない。

ところがその宗教といふものが段々世の中に長く傳つて居りますと、兩方に分れてしまふ。一方は、教を弘める人が、自分が贅澤したくなつて來る。小さいお寺では幅が利かない、大きいお寺を建てる、木綿の着物では幅が利かない、金襴……(笑)と斯うなつて來る。そこで教を弘めて、教を弘めるお禮として物を貰ふのは惡いとは申しませぬ。坊さんの方も居しやるから確に斷つて置く、(笑)教を弘めてお禮を貰ふのは惡いとは言はないが、しかし教を弘めないでお禮だけ先に考へるのは、これは確に惡い。(笑)さうなつて、自分達の榮華を圖らう、自分の寺を立派にしよう、自分の着物を立派にしよう、自分の山門を立派にしようとなつて來ると、世の中の人を導くのではなくて、世の中に氣に入るやうなことを言ふことになる、そこで宗教が墮落する、教は世を導くものであるのに世に導かれる、だから墮落する。世間が右と言へばやはり右と言ふ、世間が左と言へば左と言ふ、世間が金と言へば「金の儲かるやうなお守を出しませう」虎列刺が流行ると言へば、「虎列刺に罹らないお禁厭を致しませう、米が高いと言へば「米の安くなる御祈禱をしませう」……(笑)斯ういふことになつて來る。それだから宗教といふものが本當に人を導く力がなくなるから、段々この世の中に引摺られて行く。これは宗教が腐つたのであつて、さうなつて宗教は惡くなる。ところがさういふ人ばかりではない。腐つた宗教に入れない人がある、潔癖な人は「世の中の俗人を相手にするからいけない、世の中を離れた方がいゝ」と、斯うなるさうすると、「人が何と言つても構はぬ」といふので山の中に引込んで古い本を讀んで居る、これは立派な人ですが、麥飯を食つて、破衣で、獨りで本を讀んで居る。これは立派な人に相違ないが、さういふ人はまた世の中を構はないでやつて居るから、これは又世間を知らなくなつてしまふ、上海事變と言つても、「上海がどうした」滿洲事變と言つても、「滿洲がどうした……」といふことになる、北陸の方に海嘯があつたと言へば、「海嘯は大分前にあつた、明治十何年だらう」(笑)といふことになつて、この世の中の出來事と關係がなくなる。たゞ古い本ばかり讀んで居るから、これは又干物のやうにカラ〳〵になつてしまつて、血の氣がなくなつてしまふ。さうい

ふ人が大學者で、何の本の何枚目の何行目に何と書いてあるといふやうなことを澤山並べて、「あの本に書いてあるのと、この本に書いてあることは、此ところが違ふ」と言ふ。ひどいのになると、「あの三行目に蟲喰があつたが、この頃どうだらう」といふやうなことになつて來る。（笑）さうなつて來ると、これは血の氣のないものです、これが又宗教を惡くする。

つまり宗教を惡くするのは二つある。世俗に媚びて腐つて惡くなる。モウ一つは世間を離れてカラカラになつて、干物のやうになつて役に立たなくなるその兩方の丁度眞中の、深い教理を持つて居ながらしかも世の中を導くといふ、この中通りを行く人がなくなるのであります。それがなくなつた結果として、宗教は世の中の役に立たないものだ、一方から言へば、「あれは世間を惑はすものだから廢めろ」と言ふ、一方から言へば、「あんな古い本ばかり讀んで居る者は役に立たないから廢めろ」と言ふ、二つの連中に對する攻撃が集つて、明治初年の廢佛毀釋となつたのであつて、當時の政治家としてはこれは達見であつたかも知れない。それで私は、今日に及んで明治の初めの愚痴などを申すことはやめた方がいゝと思ふ。これは佛教の諸君にお忠告を申す、廢佛毀釋でひどい目に遭つたと言つて、今頃愚痴を言ふのはいかぬ。殊に日蓮聖人の教の流を汲む人は、日蓮聖人が迫害に屈しないのがそれが偉いので、それが特色だと言つて置きながら、自分達が迫害に對して愚痴を言ふやうでは、宗祖を辱めるものだと思はなければならぬ。（拍手）そこは餘程シッカリしなければいけない。

斯ういふやうな譯でドウモ我國の佛教も振ひませぬでして、取敢ず西洋の文化の表面を取入れて來ました、斯の如き時代に當つて、如何なる艱難にも屈せず、如何なる迫害にも堪へて、さうして東洋固有の文化を十分に盛にすることに依つて、西洋の文化の表面だけを學んだ當時の人の考を根本から直してやらうといふ風に奮起されたのが、我が本多日生上人であつたと私は確く信ずる。（拍手）この精神を吾々は繼いで行かなければならぬ。無暗に西洋排斥はいけませぬ。善いところは何處までも採らなければならぬ。しかしながら又何でも「佛教は日本に緣があつたら昔に戻れ、昔に戻れ」といふことはいけませぬ、昔に戻つたら駄目です。徳川時代の佛教なんといふものは、迷信でなければ干物のカラ〳〵見たいなものでいけない、モット前に遡らなければいけない、佛様の本當の精神に戻らなければならぬ。又日蓮聖人の教を學ぶ者は、日蓮聖人の眞の精神に戻らなければいかぬ、これが今日お互の間に於ける最も大事な問題である。本多上人が亡くなられてから三年經たうが、五年經たうが、十年經たうが、その歳月は永遠の命に較べれば何でもない。本多上人御自身としても永遠の命を持つてゐらつしやる、吾々が悔んで上げてもお喜びにはならぬだらうし、吾々が放つて置いても別に腹をお立てにもならぬだらうと思ふけれども、殘つた吾々が上人の御生前の御精神を吾々の心の中に生かして行つて、活きた宗教を自分のものとする、さうして東洋固有の文化を十分に發揚して、今の難しい時代に當つて行くといふ、この決心をして行くこと、これが上人に對する本當の追善の意味ではなからうかと考へます。（拍手）

私共は力が足らぬ者でありますけれども、私も力の許す限りを致しませう。皆さんも幸に斯く澤山お集り下さつたのですから、このお集りになつた今日のお心持を本となさいまして、出來るだけ佛様の教の本當の精神を發揮することに努めて戴きたいと思ふ。本多上人は生前に於て隨分敵を多く持つてゐらつしやつた、正しい道を信じて世に立つ者は敵なくしては居られない。ドッチでもいゝといふやう

なことを言つてはならぬ、お上手といふものは人間の本當の道に一番工合が惡い。世の中に身を立てるにはそれが無事です昔の話にあります。將軍樣が向島へ鷹狩に行く時に、天文方に『明日の天氣如何これあるべきやと』尋ねると、天文方はチャントお答申した「雨降り候　天氣に御座無く候」（笑）斯う言へばドッチでも當つて居る、雨が降らないと、雨の降るやうな天氣ではないと言ふ、若し雨が降ると、雨が降るから天氣ではないと申上げた「雨降り候、天氣に御座なく候」（笑）ドッチにでも取れる、これなら無事です、斯ういふ話がありますが、ドウモ世の中の人が斯ういふ流儀で困る。右のやうな、左のやうな、ドッチにも取れるやうなことを言ふて居つて、さうして、自分の一身を全うする、一身を全うする爲に天下を誤るといふことになる。それでは教を傳へる人には濟まぬことである、教を奉ずる人としても濟まぬことである。本多上人が天下に多くの敵を持たれたといふことは非常に尊いことであります。（拍手）と言つて無暗に喧嘩をするには及びませぬ。日蓮宗の人は兎角喧嘩好きで困る、「この間救世軍の横で太鼓を敲いて追散らしてやつた、愉快だつた」（笑）といふやうな人がありますが、そんなのはたゞの喧嘩ですから、チットモ善いことも何もありませぬ。吾々は正しい事を踏んで恐れないといふ勇氣、さうしてしかも不正なる者は惑れなき者でありますから、これを憎まずして包容してやるといふ大きな心持、これを持たなければならぬ。さういふ心持で私共は及ばずと雖も、佛樣の本當のお趣意を宣揚する爲に聊かの力を盡したいと思ひます。幸にお來會になりました諸君が、私の申す事が大して間違でもないとお考であるならば、御銘々のお力の及ぶ範圍に於て御援助、お鞭撻を下さいまして、ドウゾ上人の遺業が永遠に輝いて世の中を照し、世の中を救ふやうにお骨折の程を切にお願を申上げます。（拍手）（文責在記者）

質疑應答

質問　法華經は女人成佛の經典と言ひますが、龍女は變成男子となつてゐます、之でも猶女人成佛と言へるのでせうか。（東京日暮生）

答

文殊海中に於て妙法華經を宣說し無量の菩薩を敎化せる事を自ら叙するや、智積亦妙經の甚深微妙を讃嘆し、此の深經を修習して而も遠かに佛を得る者ありや否やを問ふ、文殊言下に龍女を擧げて其の畜趣是れ善報に非ず女身是れ善機に非ず況んや幼童是れ久修に非るも、然も能く弘誓定慧の諸行を具足し、刹那頃に於て菩提心を發し不退轉を得たるを答ふ、智積未だ別敎の麤見を出でず則ち歷劫修行を擧げて即身成佛を難じ、久修勤行の佛を牽いて須臾の成を信ぜず。言未だ訖らざるに龍女一會の大衆を驚かして佛前に進止禮敬し、深絶の妙音を列ねて讃佛偈を頌し、持經の得解深く法身眞因の聖位に達せる事を陳べて證を唯世尊に引く。此に於てか智者舍利弗義に記別を蒙ると雖も猶是れ無量長時の行因を待つ、更に或は猶未だ三藏淺權の執を脫せず、三僧祇劫諸波羅密を修し百劫の中相好の業を植ゑ、佛機熟するを待つて乃し漸く斷結成道すると思ふ、乃ち得々として出でゝ龍女を難詰して止まず、佛道は曠曠なり況んや女身にして幼少なる、五障の報佛身に契なし云何ぞ速かに作佛する事を得んと、少女默して答へず、楚々蓮歩を運んで即ち一寶珠を世尊に奉るや佛遠かに之を受け給ふ、默識神通圓解を表し修得の圓因まさに圓果を刻する事を示せる、唯佛と少女と破顏微笑の間に知るのみ鼓に乃ち彼女は智積身子を豫め誡め、復此よりも遠かならん『觀我成佛』豈只徒らに自他を別たんや、各々之を己證に觀ぜよと忽ち彼の南方機緣熟する所に赴いて八相成道し、妙法を演說して群生を利す、智積舍利弗默然信受す。夫れ龍女の變じて男子と成れる、是れ唯作佛の儀相なるのみ、敢て女身を轉じて男子となり、然る後始めて漸く佛と成りしに非ず、又轉身せずんば作佛し得ずといふにも非ず、巨眼徹視よく經を見よ。夫れ先に屢智積舍利弗藏別權敎の執見を挾んで速疾頓成を難じ、又特に女身は垢穢にして法器に非ずといへるに對し、龍女言下に女身を轉じて男子と變ぜる、即ち是れ女身の內堂々として男子誇稱の佛德を圓具するを顯し優に法器たるを證せるもの、女即男、男即女、一實菩提の種智法眼の前には無男無女なり、一相一味極果の種性一念三千十界具足し法界圓融して隔歷あるなし、男女形體の別の如き亦何をか云はんや。大涅槃經に說くが如き「若し佛性を知ること能はざる者有らば、我れ是等を說いて名けて女人と爲す、若し能く

佛性有りと知る者は、我れ是の人を說いて大丈夫と爲す、若し女人有つて能く自身に定んで佛性有りと知らば、當に知るべし是等は即ち男子と爲す」と、今妙法華經提婆品に於ける龍女成佛の一段、正に涅槃經四十卷の現證此の品に在り、見よ文に云く、「龍女忽然の間に變じて男子と爲り菩薩の行を具して即ち南方無垢世界に行き云々」夫れ菩薩行といふ、是れ正に大丈夫見佛性開發の妙事たるなり、此に於てか知る、彼女變成男子の一事たる、上述再度の難詰に對して無言を以て大說法せるもの、老哲學者と可憐の乙女と、對照すでに奇なり、然も彼は未だ權智を說せず、此は既に圓熟の妙信を體解す、經の文段起靈前後照應し影略互顯せる、寧ろ這般の間うたゝ妙味を見るべからずや、乞ふ問者我鼓三折更におもむろに讀經眼を涵養し來れ、語に云ふ眼光紙背に徹すと、是なる哉〳〵。況んや更に少しく論理的に之を示さんか。かの變成男子の事たる、是れもと〳〵女身が變成男子して以て作佛せるもの、男子が男子と成りて作佛せるに非ず、苟くも女身が作佛するに就て變成男子せんとも、又は女身の儘ならんとも何等敢て問題とするに足らざるなり、根本の身既に夫れ女人なり、以て即ち優に是れ女人成佛たるの論理は立ち得。況んや變成男子の事たる、是れ前述せる如く彼女が本具佛性の妙德を開發顯示せるものなるをや。所謂惑苦の當體三道即三德と悟るを變と說くと言はんか。又龍女成佛も妙の一字の變作なり、而して此の龍女變成男子とは龍女又提婆とも變ずるなり、提婆又龍女とも變ずるなり、之妙の一字の所作なり又龍女は色法の成佛なれば即身成佛なり、提婆は心法の成佛なれば即心成佛なり、而も色心不二なるを妙法とは云ふ也。提婆龍女の成佛と云ふは、我等が色心二法の成佛といふ事たる也。蓋し龍女が成佛せるは妙法の體を得居れるが爲の故なり、否龍女の體そのまゝ妙法の體にして、かの惡逆の調達も亦妙法の體なり、同じく妙法の體なる故、龍女も提婆と成り得れば、提婆も龍女と成るを得る也。即ち妙法の尊高なる法門よりして同體不二を論じ、以て男女の別なく色心二法を一具して成佛得道するを論ず。更に況んや又八相成道の事たる佛身は是れ男子大丈夫の相を以て佛果の相となし、內證の妙體を外相莊嚴するものたる事、佛道通途の談道なるをや、宛もかの佛性を信知せる者を以て男子と云ひ大丈夫と云ひ、以て女子を擯するが如きと一般なり。然も固より此の佛性を修顯得體したる佛身極果の境界には男相女相といふ如き、又何をか係る事を爲さんや。當に知るべし問者が問題として提擧し來りし所以の處に、寧ろ却つて又正に女人成佛たる所以の理は含まれ居るものなるを。

かの必ず女人は一度び改轉變身するに非ずんば成佛し得ずといふ如き、之權大小乘不融未究竟の權說たるのみ。今法華の經文何れの處よりしてか斯くの如きの論理は成り立ち得るや、龍女の變成の一段決して爾前凡百の諸經と同一視する可からず、固此の一品は、一切衆生悉有佛性十界皆成佛道てふ開權顯實迹門の經意を享けて之を結成せんとするに當り更に乃至妙經最勝の功德を令法久住發願弘通の者の前に例示勸奬せんとして、爾前の諸經に捨てられありし惡逆の一人提婆と相並んで女人の龍女と二人共に俱にひとしく極果に登るべきを實證せるもの、是れ一代聖敎佛性論の歸結なり、後の摩訶波闍波提耶輸陀羅等六千の比丘尼同じく授記の恩惠に浴せる玄旨是れ同じ。唯龍女の一段に於ては、更に加ふるに忽然之間に速疾頓成の即身成佛を證せりといふもの、是れ純圓妙經の法力たる所謂行淺功深以顯經力を示せる所にして、是れ特に留意す可き所たる也。

因みに敎義の一二に涉つて解明を試みんか。龍女が成佛是れ實者とやせん權者とやせん。他宗の徒多くは、之高位の聖人下凡に軌とせんが爲に近成を示せるもの、實凡は成ぜず定んで權化なりと固執するあり。予難じて云く、權は是れ實を引く。實凡成佛せずんば權化無用なり、實行疾からずんば權行徒らに引くのみならん、經力をして沒せしむ等云々。されど權者の義も又無きには非ず、之則ち專ら實本權迹に約して以て權巧を爲すと謂ふに非ず、體本用迹に約して以て權實を論ずる也。蓋し眞應二身相對の義に於て、從因至果の談道に依り、行に酬ひて理に契ひ法身を證するを體本と云ひ又は實と名け、此の法身の體より應身の用を起すを用迹と云ひ又は權と名く。（此の義は、今旦く台家の所判を藉るのみ、敢て固守すべきにあらじ）爰を以て一の龍女に實者と云はるゝ義と權者と言はるゝ義と二途あり、面白き處なり。蓋し海中の龍女は實の畜類にして權者に非ず、然も文殊の妙法を聞いて既に無生法忍を得、初住の位に入り實報無障碍法身の菩薩の自內證に居せるは之實者なり實得なり。然るに今靈山に來つては其の法身自行の實證より化他の應用を起して、女身を變じて男子と成り、此を去り彼に往いて作佛の相を示し、彼此兩土の衆說法を開見して並びに益を蒙るは之權者の化用なり所謂內證成佛は自行の實體、八相成道は化他の權用、又體本用迹體實用權の理なるもの、即ち從眞起應の相にして、則ち實證に由つて權用を起し以て圓經の成佛の速疾なるを證するなり。故に權實二義經力俱に成じて理徒然ならず。而て龍女成道に就て其の佛果分極の如何を尋ぬるに、此れ分證の成道にして初住成佛といふが決擇なり。華嚴に所謂「初發心時便成正覺、所有の慧身他に由つて悟るにあらず、一發一切發にして如來の一身無量身を得、淸淨の妙法身湛然として一切に應ずるもの」即ち初發心住に一品の無明を斷じて一分性具の三德を修證し、身を百界に現じて、八相成道し廣く群生を濟ふ、此は是れ普現色身三昧權巧の力用なり。夫れ龍女既に無生忍を得たり、まさに物の好む所に隨つて神變を起し、現身

成佛以て圓經を證し、亦當に法師文殊の言に應じて一會の疑
妨を拂ふべき也。妙經の說相其の玄義はた幽旨窺知すべきも
の乎。況んや我等今壽量の極說を信受して正に果地門の妙位
に入り、一超直ちに如來大智の內證と冥合して極果廣事の大
功德を受得す、凡位即佛位大覺の微極、現當二世即身成佛の
大果報此に定まる、開迹顯本皆入初住豈遠きを待たんや、信
念成佛の要道此の處に在り矣　如來の大慈此經の妙用うたゝ
鑽仰すべきに非ずや。最後に一文の經證及び本化の祖判を引
いて彌妙解を增益せしむる所あらん。

　芬陀利經に云く、是に於て即時に女人變じて菩薩と爲り、
衆會皆驚くや即ち變じて佛身と爲り、相種好皆具足し、國土
弟子佛の所爲の如し。

　一代大意鈔に云く、法華經は惡人に對して十界の惡を說き
惡人五眼を具しなんどすれば惡人の極を救ひ、女人に即して
十界を談ずれば十界皆女人なる事を談ず、何れにも法華圓實
の菩提心を發す人は迷うて九界の業力に引かるゝことなき也

　開目鈔に云く、寶塔品の三箇の敎宣の上に提婆品に二箇の
諫曉あり、提婆達多は一闡提なり天王如來と記せらる、涅槃
經四十卷の現證此品にあり、善星阿闍世等の無量の五逆誇法
の者、一をあげ頭をあげ萬ををさめ枝をしたがふ、一切の五
逆七逆誇法闡提天王如來にあらはれ了んぬ、毒藥變じて甘露
となる、衆味にすぐれたり、龍女が成佛此れ一人にはあらず
一切の女人の成佛をあらはす、法華已前の諸の小乘經には女
人の成佛を許さず、諸の大乘經には成佛往生をゆるすやうな
れども、或は改轉の成佛にして一念三千の成佛にあらざれば
有名無實の成佛往生なり、擧一例諸と申して龍女が成佛は末
代の女人の成佛往生の道をふみあけたるなるべし。儒家の孝
養は今生にかぎる、未來の父母を扶けざれば外家の聖賢は有
名無實なり、外道は過未を知れども父母を扶くる道なし、佛
道こそ父母の後世を扶くれば聖賢の名はあるべけれ、而れど
も法華經已前等の大小乘の經宗は自身の得道猶かなひがたし
いかに況んや父母をや、但文のみありて義なし、今法華經の
時こそ女人成佛の時悲母の成佛も顯れ、達多惡人成佛の時慈
父の成佛も顯るれ、此の經は內典の孝經也。

南無妙法蓮華經　　（河合陟明）

記事

本部團報

大恩敎主釋迦牟尼世尊御降誕會　四月八日は
年を趁ふて花祭りが各方面で盛大に擧行さる
ゝことは殆に法國の爲めに歡びに堪へない。
本部に於ては同日午後六時　講堂に齋壇をし
つらえて大法要が營まれた（磯部理事の慶讚
文省略）七時より左記の講演に移つた。

釋尊降誕の大恩　　河合陟明氏
日本經濟の新傾向　　田中道爾氏
時局に對する宗敎的考察　　中村清一氏
如來の大悲　　磯部滿事氏

小西日喜師が「活ける佛敎とは何か」の題で
お話し下さる筈であつたが、急に支障あつて
御出講出來なかつた事は甚だ遺憾であつた。
併し四氏が肺腑より迸り出る至誠に來衆は時
の移るを忘れ恍惚として十時過までも熱心に
傾聽された。當夜は貧弱ながらも餅本と御供
物を一同へお頒ちして、俱に共に心から祝福
しつゝお別れした。

法華經講座毎木曜日晩の同講座は今や序品の
偈文に入つて活釋を與へられつゝある。十三
日は小林先生の御都合で十二日の水曜日に繰
り上げて、講義後に茶話會を催し會員の隨意
なき感想が互に交へられ、極めて意義深い一
夜を過ごされた。願くはお互に一人でも多く
この尊い講座に連なるべく、自らも亦人をも
誘ひたく思ふ。

日曜講演　四月九日は八日の翌日である爲め
特に休講とし十六日は「歷史に輝く日蓮聖
人」山口智光師及び「開目抄續講」河合陟明
氏に依り、廿三日は「感話」上田理事長並に
「釋尊降誕と日蓮聖人開宗の意義」和賀義見
師に依り夫れ〴〵講話された。

團員維持員會及び總會　四月廿三日
午後一時より本部に於て開催された。昨
年創立當時の設立者は、僅かに百十三名
に過ぎなかつた、が今回は皆さんの御努
力に因て二百〇三名を算するに至つた。
而して當日、出席並に文書に依る有權團
員數百二十八名を以て、昭和七年度事業
報告と、八年度豫算を原案通り認定され
た。

　左に七年度收支勘定明細表を掲出して
團員各位の御高覽に供します。猶ほ庶務
要項、並に事業狀況は其都度誌上に發表
して居りますから省略致します。

收支勘定明細表

（自昭和七年六月二十二日
至同　八年三月三十一日）

一、收入勘定

一金六一三二六円九銭　總收入

內譯

金二四三九円〇〇　寄附維持醵出金
金六一八二二　團費誌料書籍代
金二六九〇〇　講座聽講料
金五三一〇五〇　法要供養
金一五三一八四　上田理事長經費補助
金七四三一三　利息及繰越金

二、支出勘定

一金五二五〇四三円　總支出

內譯

金九九二円三九　雜誌其他印刷諸費
金一二八二七七　布敎並ニ法要諸費
金九八〇九八　什器備品類
金二四二二七　登記料及稅金
金一四二九八　郵稅及通話料
金二〇〇〇　速記料
金一七二二一　交通諸費
金七一七一　電燈瓦斯代
金三九二五〇　人件費
金三五二六二　諸雜費
金六〇〇〇〇　上田理事長ヘ返還

三、收支差引勘定

一金八八二二六円　次年度ヘ繰越

右之通候也

昭和八年四月二十三日

横濱教誌

三月三日 會員久保田捨三氏慈父御不幸のため、會員一同、同氏宅に集合して御靈前に唱題廻向。礒部先生又東京より御參加ありて一場の御話を下された。

同四日 神奈川篠原町の西村氏方に集會。礒部先生の御講話。

同十日 礒子廣地の高橋氏方にて集會。此夜礒部先生御みえにならぬのかと思はれたが、九時頃御出で下された。そしてホンノ少々我々のために御話遊ばされて又直ぐ東京へ御歸りになった。僅な時間でも御都合の付く限り態々東京から御來講下さる先生の御熱情に此夜の出席者一同は今更に感激した。

同十二日 神奈川鶴屋町の京田氏方に集會。礒部先生は御都合にて御みえにならなかつた金子光和氏が「崇峻天皇御書」のことに關して話をされた。

同十四日 東京本佛教會の和賀義見師御來講午後三時より神奈川高島通りの石毛氏宅にて夜は七時より同二本榎の金子氏宅にて。

同十五日 東京に於ける日生上人三回忌參列のため會員有志十餘名上京した。

同十八日 東京小松川立正會館の小西日喜師御來講。午後三時より生麥貝塚氏宅にて、夜七時より引き續き三ツ澤岩上氏宅にて。

同二十日 中區千歳町高田氏方に集會。礒部先生御出講。

同二十四日 神奈川三ツ澤齊藤氏方にて集會小西日喜師、礒部先生御來講。

同二十七日 春雨のショボ〳〵と降る夜であつた。礒子の大内氏方にて集會、雨の中を礒部先生例の如く東京小石川より御來講下された。

二本松教信

三月七日 夜於蓮華寺題目講修行。

同八日 午後一時五十七分二本松驛通過にて戰死者遺骨山形聯隊に向ふ因つて出迎ひ讀經す。

同十五日 二本松佛教不染會托鉢修行。

同十六日 月日の流れも早く慰師本多貶下の御三周忌御命日である十六日午前十時より二本松町蓮華精舍に於ては信徒遊佐八重子女史の發願にて有志相集り貶下の追悼會を虔修種々追憶に時を過ごし名殘惜しく散會せり。

同十七日 三陸震災義捐金金若干を寄附す。

同二十四日 午後二時二十一分二本松驛通過にて戰死者故郷に向ふ因つて讀經す。

新加盟者

静岡縣磐田郡西淺羽村　安間千吉殿

東京市蒲田區矢口町原二七三　佐野中志殿

東京市淀橋區西大久保一ノ五一七　鈴木祐五郎殿

同　小石川區小日向水道町二十四　濱中治三郎殿

（礒部氏御紹介）

東京市小石川區關口町一七七　伊集院象明殿

（宇野博順氏御紹介）

福島縣瀬上町　瀬戸榮四郎殿

（中村美津氏御紹介）

寄附維持金團費誌料領收

（自三月二十一日至四月二十日）

一金拾圓也　横濱　中村清兵衛殿
一金壹圓貳拾錢也　山形縣　村田義本殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　齊藤又治郎殿
一金壹圓貳拾錢也　横濱　伊藤喜造殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　齊藤彌一郎殿
一金貳圓貳拾錢也　靜岡縣　安間千吉殿
一金參圓也　山形縣　遠藤貞次郎殿
一金參圓也　大阪　南卯之松殿
一金壹圓五拾錢也　弘前　竹内軌髮殿
一金壹圓也　東京　佐野中志殿
一金貳圓也　東京　森川泰修殿
一金貳圓貳拾錢也　彦根　林田芳太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪　富田清子殿
一金拾圓也　東京　高田直三郎殿
一金貳圓貳拾錢也　同　伊集院象明殿
一金參圓也　同　古澤たみ殿
一金貳圓貳拾錢也　豊橋　田村仙作殿
一金貳圓貳拾錢也　新潟縣　村山智全殿
一金壹圓貳拾錢也　東京　鈴木鶴五郎殿
一金五拾錢也　同　濱中治三郎殿
一金貳圓也　東京　田中久殿
一金壹圓也　青森　柏木吾市殿
一金貳圓貳拾錢也　千葉縣　時友太助殿
一金貳圓也　東京　宇野博順殿
一金壹圓也　同　石原重太郎殿
一金五拾錢也　同　田中峰太郎殿
一金五拾錢也　同　日下部二葉殿
一金拾圓也　同　和賀謙介殿
一金貳圓貳拾錢也　福島縣　瀬戸榮四郎殿
一金參圓參拾錢也　千葉縣　山田平八殿
一金壹圓六拾錢也　東京　岡野あきの殿
一金貳圓貳拾錢也　同　川奈錠作殿
一金參圓貳拾錢也　同　藤崎勘三郎殿
一金貳圓貳拾錢也　千葉縣　片岡嘉助殿
一金貳圓五拾錢也　山口　野北祐次殿
一金貳拾四圓也　盛岡　齊藤命殿
一金貳圓也　東京　榎本正殿
一金貳圓也　同　沼部彌太郎殿
一金拾圓也　横山正三殿
一金參圓也　同　岩瀬たけ殿
一金壹圓貳拾錢也　愛知縣　野老乾一殿
一金貳圓貳拾錢也　北海道　福士忠治殿
一金拾圓也　東京　和賀義見殿
一金貳圓貳拾錢也　仙臺　井上才吉殿
一金壹圓也　東京　大菅きぬ殿
一金壹百圓也　ホノルル　妙法廣布會殿
一金貳圓貳拾錢也　明石　梶川福太郎殿
一金貳圓五拾錢也　千葉縣　秋山善次郎殿
一金壹圓貳拾錢也　愛知縣　中村折次郎殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　東端愛吉殿
一金五圓也　同　山田英二殿

右難有入候仕候也

財團法人　統一團會計

本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖語錄　改版　特價送料共　金壹圓八拾錢
一日蓮主義本領　仝　金貳圓拾錢
一法華經要義　仝　金貳圓五拾錢
一日蓮主義心髓　仝　金壹圓五拾錢
一日蓮主義精要　仝　金貳圓九拾錢

穢部滿事謹輯
一本多日生上人　特價送料共　金壹圓七拾錢

申込所　東京市小石川區音羽町六ノ一七
財團法人統一團
振替東京九四二〇番

一月刊「教」誌　定價一冊　金拾錢　送料　金五厘
一ヶ年前金　金壹圓貳拾錢　送料共

申込所　東京市小石川區音羽町六ノ一七
「教」發行所
振替東京一〇九四〇番

統一定價

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

前金之事

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓	前金之事
一頁	金拾五圓	
半頁	金九圓	
四分一頁	金五圓	

昭和八年四月廿四日印刷納本
昭和八年五月一日發行（第四百五十八號）

東京市小石川區音羽町六丁目一七
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京市品川區南品川二丁目一八一
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

發行所　東京市小石川區音羽町六丁目一七
財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

目次

輕舉盲動を警む
聖訓摘要……日生上人
釋尊と日蓮聖人（上）……和賀義見
日什正師諷誦章講話（三）……梶木顯正
日生上人を憶ふ（其九）……武井三猛
品川問答三景……貝塚生

記事
○本部團報
○各地教信
○寄附團費誌料領收
○編輯室より

第三十八年六月號